

水稻収穫後のほ場管理について

発信日：2024年10月24日

収穫後の水田管理が翌年の高品質米の安定生産につながります。来年に向けて次の対策を行ってください。

1 雑草対策

(1) 多年生雑草（オモダカ・クログワイ）（写真1・2）

十分に防除できなかった水田では土中にある塊茎が越冬し、翌年も発生します。冬季（12月～1月）に荒起こし（塊のままひっくり返すように掘り起こすこと）を行い、寒さにあて乾燥により死滅させます。



オモダカ（写真1）クログワイ（写真2）

(2) ナガエツルノゲイトウ[特定外来生物]（写真3）

相模原市、平塚市、茅ヶ崎市、厚木市、伊勢原市、海老名市、座間市、寒川町の水田で発生が確認されています。他の地域でも水田に発生していないか確認し、疑わしい雑草が見られた場合は、最寄りのJAまたは農業技術センターに連絡してください。

ナガエツルノゲイトウは畦畔沿いに繁殖しやすい多年生雑草です。再生力が旺盛で、茎はちぎれやすく、植物体の断片や地下茎から増殖します。用水の流れや機械作業（刈払い・耕うん作業）で拡散するため、降霜前までにラウンドアップマックスロードなど水田刈跡に適用のある非選択性除草剤を散布してから耕うんを行ってください。



ナガエツルノゲイトウ（写真3）

(3) ノビエ（写真4）

本年はノビエの残草が目立ちました。ノビエは夏から秋にかけて出穂・開花・結実して種子を土壤面に落下させ、翌年も発生します。冬期に耕うんを行い、種子を10～12 cm程度埋没させます。



ノビエ（写真4）

2 土づくり

(1) 秋耕について

秋耕とは稲刈りが終わってからの秋の間に耕うんを行い、稲わらや稲株をすき込むことを指します。秋耕を行うことで稲わらの腐熟促進やメタンガスの発生抑制等の効果が得られ、翌年の収量や品質の向上が期待できます。そのため、水田の稲わらや稲株は収穫後早急にすき込んでください。すき込む際に石灰窒素〔20kg/10a〕を施用すると、稲わらの分解が促進されます。石灰窒素のほか、ようりん〔40kg/10a〕やケイカル〔120kg/10a〕などの土壤改良剤も稲わらの分解を促進します〔施用量は目安〕。

(2) 堆肥の施用

水田に堆肥を施用する場合の基準は下表のとおりです。施用時期は秋から冬にかけて行い、土中で分解を促進させます。ただし、湿田では水稻の根に障害を及ぼすガスが発生する恐れがあるため、堆肥の投入を行わないようにしてください。

また、次年度の作付けに向けて土壌分析を行い、水田の地力状況を把握するようにしましょう。詳しい内容については最寄りの JA までご相談ください。

表 堆肥の基準施用量 (t/10a) ※ 神奈川県作物別施肥基準より

	牛ふん堆肥	豚・鶏ふん堆肥	稲わら堆肥
乾田	0.5～1	0.5	1
半湿田	0.5	0.3	0.5

3 病虫害対策

(1) 紋枯病 (写真5・6)

今年度は各地区で紋枯病の発生が多くみられました。紋枯病は前年の被害株や畦畔などの罹病雑草に形成された菌核が水田で越冬し、翌年も感染します。そのため、翌年は紋枯病の発生に注意しましょう。



紋枯病 (写真5・6)

(2) スクミリンゴガイ (写真7・8)

ア 貝を発見したら、捕殺しましょう。捕殺の際は素手で触らないように気を付けましょう。

イ 冬季 (12月～1月) にロータリー耕を行い、貝を掘り起こして寒気にさらすとともに破碎します。トラクターの作業速度を遅く (時速 1.3～1.5 km)、ロータリーの回転を速く (PTO 回転約 800rpm)、浅めに耕うん (約 6 cm) すると、効果が高まります。発生密度が高い水田では複数回行いましょう。越冬個体が多い水口、水尻、水が溜まりやすい畦畔沿いは、ロータリーが届かないので、スコップ等を使用して貝を破碎しましょう。



スクミリンゴガイ (写真7) 破碎時の状況 (写真8)

ウ 越冬場所となる用排水路や柵(ます)の泥上げを行い、越冬している貝を破碎し、越冬密度を低下させましょう。泥上げは地域全体で行うと効果が高いです。

4 獣害対策

ひこばえはイノシシやシカなどのエサになります。獣害が発生しやすい地域では、収穫後早急に耕うんし、すき込みましょう。

問合せ先

農業技術センター普及指導部作物加工課

TEL : 0463-58-0333 内線 381～384